# 大学開放事業から生まれた生産者と消費者の連携事例

山岸主門*・竹中杏奈*・福間忠士**・井上憲一*・巣山弘介*
（*島根大学生物資源科学部・**しまね合鴨水稲会）

キーワード：援農、生産者、消費者、農業体験、大学開放事業

Cooperation of the producer and consumers resulting from Shimane university extension

Kazuto YAMAGISHI, Anna TAKENAKA, Tadashi FUKUMA,
Norikazu INOUE & Kousuke SUYAMA

Key Words：community supported agriculture, producer, consumer, agricultural experience, university extension

## Ⅰ.「みのりの小道」とは？

筆者らは、島根大学憲章の前文にある「地域に根ざし、地域社会から世界に発信する個性輝く大学」および「学生・教職員の協同のもと、学生が育ち、学生とともに育つ大学づくり」を具現する場として「ミニ学術植物園」を創出した。その結果として、キャンパスの緑化整備も行われるというプロジェクト、通称「みのりの小道」活動を2004年秋から実施している。この活動では、生物資源科学部の教員等が研究対象としている植物等を緑化素材に取り入れることでストーリー性・アピール性を生じさせ、また、学外の地域住民や学生が管理作業に関与する仕組みを構築した[1)]。

学部の取り組みとして開始したこの「みのりの小道」活動は、その後、全学的に様々な位置づけがなされるようになった。その位置づけを整理したものを表１に示す。

表１　「みのりの小道」の島根大学内での様々な位置づけ

| 項目 | 主な対象 | 主な内容 | 担当部署 |
|---|---|---|---|
| 学部緑化・交流 | 学部学生・学部教職員 | 学部長裁量経費や学部後援会費から援助頂き、通常の管理経費等に充てている | 生物資源科学部 |
| 緑化等のキャンパス・アメニティ整備 | 学生・教職員 | 毎秋行われるキャンパス内の一斉落ち葉清掃をサポートし、集積した落ち葉を数年堆積し、できあがった腐葉土をみのりの小道等で有効利用している | 環境マネジメントシステム実施委員会 |
| まるごとミュージアム屋外施設 | 一般者 | 島大まるごとミュージアムのコアゾーンに位置し、屋外施設として、一般者に開放している | ミュージアム |
| ビビットカード対象活動 | 学生 | 学生のボランティア活動やサークル活動などの正課以外の諸活動に対して、ポイントが与えられ、ポイントに応じて特典が受けられる | 学生支援課 |
| 一時的な託児活動 | 学生・一般者 | 大学の教職員・学生の、子育てと仕事・学業との両立をサポートする人材養成講座の修了学生が、みのりの小道に参加する一般者の子どもを一時的に預かる活動である（試行中） | 男女共同参画推進室 |
| 大学開放事業 | 一般者 | 大学の持つ「知」や「技」を広く地域の方々に開放する事業である | 生涯学習教育研究センター |

日常的に「学内に存在する」ことについては、緑化等のキャンパス・アメニティの維持・向上の側面として、また、「島大ミュージアム」の屋外施設としてそれぞれ位置づけられる。ほぼ毎月一回開催する「公開作業」については、学生にとっての島大ビビットカード（正課外活動にポイントを付与しポイントに応じて特典が受けられるカード）の対象活動として、また、大学が主催する行事に参加する一般者の子どもを一時的に預かる活動（試行中）として、それぞれ位置づけ・評価されている。これらに加え、「みのりの小道」は、地域の一般者を主な対象とした生涯学習の枠組みによる「大学開放事業」の側面も有しているが、今回は、この大学開放事業の参加者間の中から生まれ、育みつつある「生産者と消費者との連携事例」について紹介したい。

## Ⅱ．大学開放事業「みのりの小道」の公開作業

生涯学習に関する世論調査[2)]によると、生涯学習を今後してみたいとする者の割合は７割超で、その理由の多くは「興味があり、趣味を広げ豊かにするため」であった。しかし、生涯学習への希望はあるものの実際に生涯学習をしていない理由は、「仕事や家事が忙しくて時間がない」という理由に加え、「きっかけがつかめない」「特に理由はない」と回答する者が意外と目立った。筆者らは島根大学の農場を利用した公開講座・大学開放事業を以前から継続しているが、その参加者の中から、「大学は何となく敷居が高いが、屋外フィールドで実施する農場の講座は参加しやすい」という好評な声とともに、「今後の予定があやふやな時に、数ヶ月先の講座に事前に申し込むのはちょっと尻込みする」といった少し不満な声も頂いていた。これらの一般者の貴重な声を参考に、「みのりの小道」では、各種植物が存在する屋外フィールドを活かし、木陰＆野外卓が存するスペースをメイン会場とした青空教室を原則とし、また、事前申込み不要・参加費も無料として、いつでも気軽に参加できるよう対応することとした。

大学開放事業「みのりの小道」活動の公開作業は、原則、毎月一回、第二水曜日の午後、14:00～16:00の２時間開催している。2004年10月から2011年12月（継続中）まで計95回実施し、参加者は延べ2,960名であった。過去７年間の全参加者数に占める一般参加者、学生参加者、教職員参加者の割合を図１に示す。

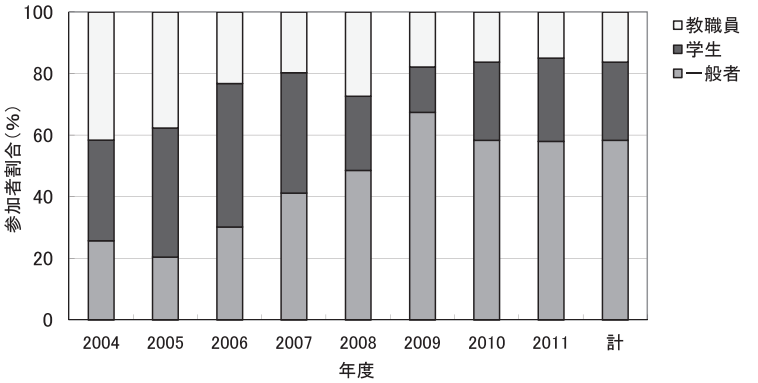


図１　みのりの小道全参加者に占める一般者、学生、教職員の割合変化

初期には、まず学生の参加を促し、学内での認知度を上げるため、筆者が担当する授業（講義や実習）とタイアップして実施することも多く、学生の参加割合が３～４割程度占めていた。その後、学生および教職員参加者の割合が減り、当初、２割程度であった一般参加者の割合が増加し、ここ数年は６割程度を維持している。初期は、「みのりの小道」の公開作業について、大学の広報誌やホームページに掲載したり、学内の様々なイベント時に併せて紹介したり、一般者に積極的に広報してきた。2008年度からは毎月の公開作業にあわせて、「みのりの小道通信」（B４版両面）を作成し、参加者に配布している。その通信の例を図２に示す。

表面は、PDCAサイクルを活用し、前回活動の実施内容を振り返り（Do）、参加者アンケートの結果（Check）やその回答（Action）を載せ、今回以降の活動予定（Plan）

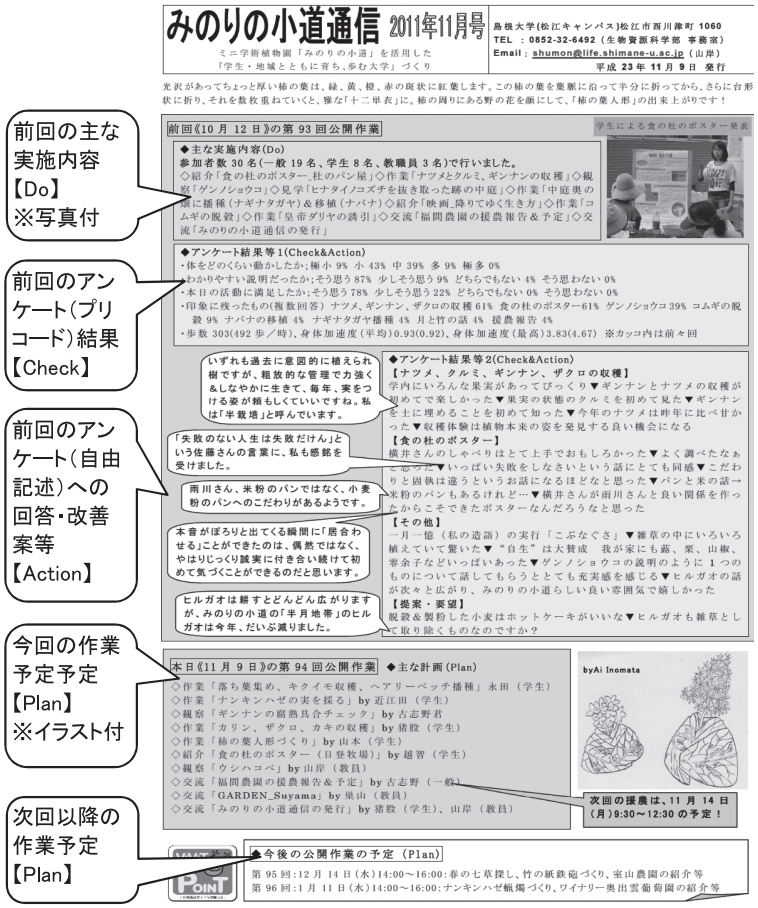


図２　みのりの小道通信の例（2011年11月号、表面）

を示す形態とし、裏面は、「参加者から提供のあったイベントの結果や告知」「筆者らの体験・興味のある新聞記事」などを適宜掲載している。近年は、「みのりの小道」の様子を端的に表したこの通信を、参加した一般者が近隣の友人に見せながら誘って参加するケースが多くなっている。また、「みのりの小道」の公開作業での交流内容を見ても、一般参加者の得意分野や興味のあることを紹介し合うケースが増え、「みのりの小道」が全体的に一般者に支えられている傾向が強まってきている。

## Ⅲ．福間農園の概要

これらの一般参加は、50代～70代の趣味として農作物や草花の栽培を行っている方たち（消費者）が大多数である。農家の方（生産者）の参加はわずかだが、ここで紹介する福間農園の園主福間忠士氏（60代）は、島根大学の知人の紹介で2008年６月より「みのりの小道」公開作業に参加するようになり、ここ３年半はほぼ毎回参加している。

以下、「生産者と消費者との連携」の場となった福間農園と福間氏について簡単に説明する。福間農園は松江市内で、大学から車で30分程度の場所にある。福間氏は、他県の企業で仕事をしながら、夫妻で生協活動や家庭菜園で野菜作りをするなかで、微生物を活用して生ごみを循環させる大切さや農薬の危険性、食品添加物の怖さなどを感じ、1998年にＵターンして有機農業を始めた[3)]。当初は、田畑は雑草に覆われ、草の除去に追われる毎日だったようだが、2003年に合鴨農法と出会ったことでブレイクスルーし、現在では、夫妻で合鴨農法のほか、各種野菜を有機栽培し、収穫した農産物は個人消費者との提携に加えて、近隣のレストランや直売所等に出荷している。

## Ⅳ．援農の仕組みの構築

福間氏は、合鴨農法をはじめとした農業全般について、消費者により深く理解してもらうことが生産にとっても大切だと以前から考えてきた[3)]。その福間氏の意図を汲み取り、「みのりの小道」の公開作業で、福間氏から合鴨農法等の実際について、定期的に話をしていただくことにした。「みのりの小道」の一般参加者の多くは、小規模な家庭菜園やベランダ・キッチン栽培を楽しんでおり、農家現場の楽しさや大変さについての話を気軽に聞くことができる機会は大変貴重であった。このような交流を継続する中で、一般参加者間でゆっくりとかつ確実に信頼関係が生まれ、2009年になった頃から福間農園の農産物の注文や農園への訪問希望が自然発生するようになった。そこで、2009年５月から、まず筆者ら大学教員が主導で何回か援農の機会をつくり、交流を開始した。その交流の中で積極的に参加した一般参加者数人に、援農の企画・調整役（コーディネータ）を依頼し、2009年８月以降はその方々を中心に援農が動き出した。

四半期ごとにまとめた福間農園の援農の回数、参加者数、主な内容について表２に示す。

表２　福間農園での援農の記録（2009～2011年度）

| 年度 | 月 | 回数 | 参加者数 | 主な内容 | 備考（イベント等） |
|---|---|---|---|---|---|
| 2009 | 4～6 | 5 | 48 | タケノコ掘り、合鴨解体、野草摘取、サトイモ植付、黒ダイズ播種、ニンニク畑草取、防鳥対策 | タケノコ掘り【５月】 |
| | 7～9 | 5 | 32 | カボチャ敷草、サトイモ草取、水田ネットはずし、黒ダイズ畑草取、ヒルガオ除去、ダイコン播種、カボチャ収穫・片付 | |
| | 10～12 | 7 | 32 | ワケギ選別・畝立・植付、ニンニク施肥・マルチ張り、サツマイモ収穫、ナバナ播種、タマネギ植床準備、ニンニク畑草取、ヘアリーベッチ・エンバク播種、タマネギ植付、ナス片付、白・黒ダイズ乾燥 | 注連縄づくり【12月】 |
| | 1～3 | 13 | 62 | ニンニク・ワケギ畑草取・施肥、黒ダイズ脱穀、エンドウ苗定植、ナバナ畑草取、水田用ネット片付、剪定枝片付、味噌づくり（４回）、合鴨解体、ニンニク追肥、黒ダイズ選別、タマネギ追肥、夏野菜播種、ジャガイモ植付、イネ苗箱土入 | 新年会（一品持寄り）【１月】 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 2010 | 4～6 | 20 | 104 | シイタケ植菌、種籾消毒、ナバナ収穫、イネ播種、サツマイモ植付、タケノコ掘り、カボチャ定植、田植え、ダイズ播種、水田の金網・ネット設置、ニンニク摘芽、サトイモ植付、ナス・トウガラシ・ショウガ定植、堆肥運搬、カボチャ追肥、オクラ畑草取、ウメ収穫 | タケノコ掘り【5月】 |
| | 7～9 | 11 | 87 | ニラ植付、ダイス畑草取、サトイモ畑草取、ダイズ畑草取・追肥・培土、サツマイモ畑・カボチャ畑草取、ナス収穫、ズッキーニ&カボチャ片付、ナス畑草取、座談会、イネ刈り、ダイコン播種、ワケギ植付準備、イネはで掛け | 座談会（卵＆ナスをテーマに）【9月】 |
| | 10～12 | 9 | 53 | はでづくり、ワケギ植付準備、サツマイモ収穫・調製、ダイコン・津田カブ間引・調製、アズキ収穫、ニンニク植付準備、合鴨用ネット片付、エンドウ播種、サトイモ貯蔵準備、ナバナ畑草取、サトイモ掘り、ダイズ収穫・乾燥、黒ダイズ乾燥、ウド片付、薪運搬 | 映画鑑賞会【11月】 |
| | 1～3 | 12 | 53 | ダイズ脱穀・選別（唐箕）、味噌づくり（4回）、ニンニク・タマネギ畑草取・施肥、エンドウ定植、キウイ樹片付・焼却、ダイズ脱粒、ニンニク・タマネギ追肥、イネ苗箱土入、タマネギ施肥、各種野菜播種 | 新年会（一品持寄り）【1月】 |
| 2011 | 4～6 | 11 | 46 | イネ播種、ゴボウ播種、カボチャ・パセリ・ニンジン・ホウレンソウ等播種、刈草収集、イネ苗箱土入れ、石・根拾い、ナバナ花摘、アブラナ科野菜片付・除草、ウド収穫、カボチャ等定植、ウリ定植、サトイモ定植、ズッキーニ定植、黒ダイズ播種、水田ネット張り | |
| | 7～9 | 11 | 55 | ニンニク・タマネギ調製、黒ダイズ畑草取、ジャガイモ掘り、サトイモ畑草取、カボチャ収穫、シソ収穫、ダイズ畑草取、エンドウの片付、ナス畑・ゴボウ畑草取、ブルーベリー敷草、ホウレンソウ・ナバナ・ダイコン播種、ハクサイ定植、イネ刈り、はで掛け | |
| | 10～12 | 13 | 66 | ダイコン畑草取、ワラ運搬、ナバナ定植準備、カキ収穫、ナス片付、芋掘り、ナバナ畑草取・施肥、カキ収穫、ニンニク調製、サニーレタス・キャベツ定植、葉菜類播種、ソラマメ・エンドウ播種、ニンニク植付、タマネギ植付、ダイズ収穫、ナバナ間引、ダイス干し場づくり、合鴨用ネット張り、鴨の捕獲 | ミニ門松づくり【12月】 |
| 計 | | 117 | 638 | | |

当初は毎月2回程度の実施だったが、2009年冬季頃から、ほぼ週に一度のペースで実施している。参加者のコアメンバーは一般者の4名であるが、毎月の「みのりの小道」で次回の援農日程を知らせ、興味をもった一般者や学生も毎回加わる形で、平均5～6名程度の援農が継続している。この5～6名という人数は、圃場や休憩スペースの広さ、作業の段取り等を考えると適正人数のようである。援農の内容は、基本的に、福間農園の仕事に合わせて福間氏がすすめているが、野菜畑の各種管理・調製作業を中心に、その季節にあった様々な作業を実施している。また、年に数回、主に援農参加者からの発案で、イベント的に、福間農園周囲の竹林を活用したタケノコ掘りや、水田からの副産物を活用した注連縄づくりや合鴨料理づくりなども開催し、新たな援農参加者の発掘に一役買っている。

## Ⅴ．援農の参加者およびコーディネータの感想

援農の参加者およびコーディネータを対象に2009年度実施したアンケート結果の一部を紹介する。アンケートは、自由回答方式を採用し、量的・質的両方の技法を取り入れた「内容分析」が可能なソフトウェア（トレンドサーチ2008）を用いて形態素分析による単語（キーワード）抽出を行った。抽出した単語の重要度を出現頻度やばらつきによって算出し、また、単語間の関連度に応じて平面上にマッピングし、分析を行った。その結果を図3に示す。左側が一般参加者で、右側が援農コーディネータである。

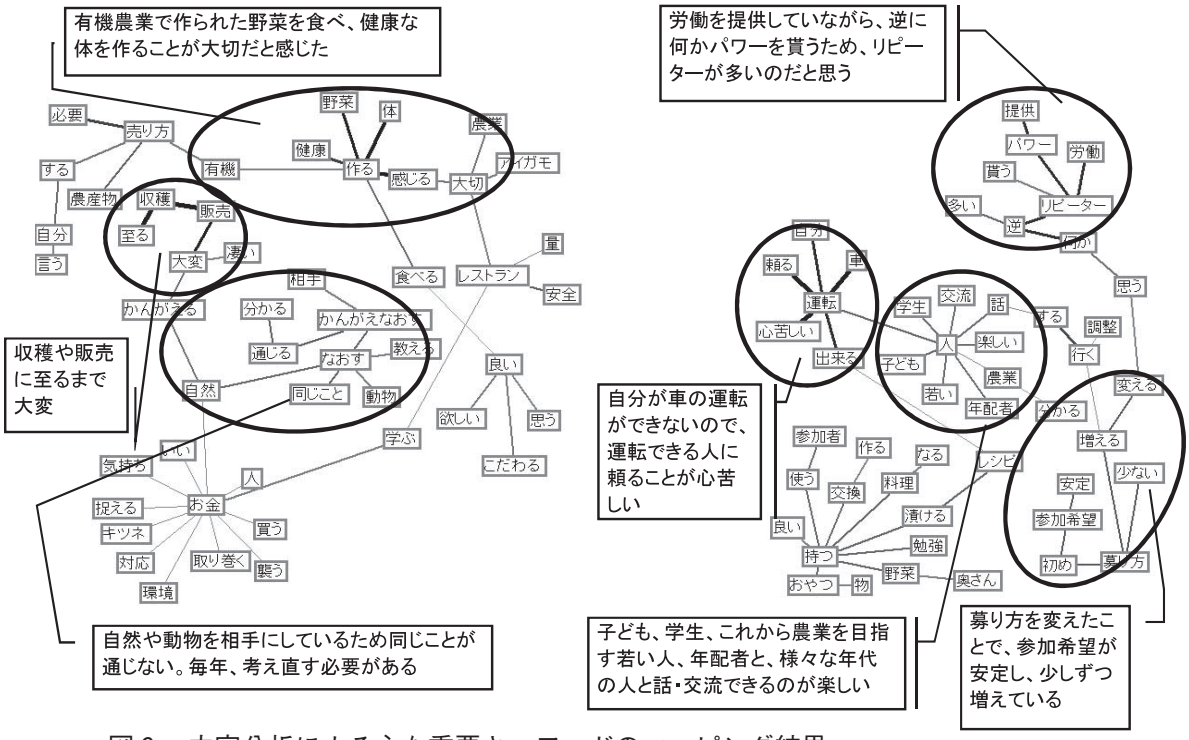


図３　内容分析による主な重要キーワードのマッピング結果
左；一般参加者，　右；コーディネータ

まず、一般参加者の感想では、「有機農業の大切さ」や「収穫・販売に至るまでの大変さ」への気づきに加え、「自然や動物を相手にしているため同じことが通じない。毎年、考え直す必要がある」といった感想が目立った（図３左）。一般者と一緒に参加した大学生の中には、「大学で農業を農学として勉強していると、農業や農作業、農作物は客体として捉えることが多いが、実際に作業をするともっと主体的なものであって、自分がどうしたいか、自分がどうしたらいいかということが重要で、他人から教わるより自然から教えられたことに自分がどう応じるかが大事だと思った」という本質を見据えた感想も見受けられた。

つづいて、コーディネータの感想では、援農の募集方法や福間農園までの交通手段の悩み・工夫の必要さなども見られたが、援農を通じて、「何かパワーを貰うため、リピーターが多い」や「子ども、学生、これから有機農業を目指す若い人、年配者と、様々な年代の人と話・交流できるのが楽しい」といった、福間夫妻や参加者との有機的なつながりの大切さへの気づきが読み取れた（図３右）。また、天候による作物の生育への影響や野生動物による被害などに接して、「買って食べるだけではわからない農業の苦労・考えることの大切さがお手伝いをしてよくわかった」との感想が印象的であった[4)]。

## Ⅵ．今後の展望と課題

大学開放事業から生まれた生産者と消費者の連携事例として、「みのりの小道」の参加者を中心に継続している援農活動を紹介したが、３年を経過した現時点でのこれからの展望や課題を４つの観点から整理したい。

### １．「みのりの小道」参加者の主体性を活かし、交流を育む

一般的に大学教員は教育・研究活動に比べて大学開放事業の位置づけは弱く、大学開放は大学の周辺的あるいは副次的な社会サービスとして意識されているケースが多いと言われる[5)]。島根大学は2006年に大学憲章を制定し、そのなかに「社会貢献」も大きく位置づけ、生涯学習に関わる公開講座

や大学開放事業もより積極的に実施されるようになってきた。今後さらに質・量ともに充実させていくことが望まれる。その中で、「みのりの小道」は大学開放事業として、７年間で通算95回の開催を数え、市民が集い学ぶ場として一定の成果を収めているものと実感している。

今回、紹介した援農活動は、この継続した「みのりの小道」活動の存在がまずあり、そこで交流を深め合った参加者間から生まれたことに大きな意義がある。その意味において、「みのりの小道」の活動は主催者側である大学が提供する内容だけでなく、参加者の主体性が活発に出てくるような仕掛けの構築や参加者同士が交流するきっかけづくりに今後より努めていきたい。

### ２．参加者の農業への理解を高める

援農をマネージメントしている組織としては、生協（生活協同組合）が代表例として挙げられる。生協の職員である山本（2008）は、「生協は教育機関でもあり、本気で消費者を変えていく使命があると考えている。消費者の意識改革として、講演会や産地訪問、農業体験を行っている」と述べているが[6]、農業を盛り立てていくためには、農業の価値を認め、援助・購入してくれる消費者の存在が欠かせない。このように、消費者の農業理解をより高めていくことが「みのりの小道」の大事な役割であると感じている。

正しい農業理解が乏しいままに農作業体験や援農に参加しても、なかなか次の参加につながらないことが多い。都市農村交流を深めていくために滞在型市民農園を提唱している東（2009）は、「厳しさを嫌い、楽しさだけを求める人は、市民農園の利用者に相応しくない」としているが、楽しさと厳しさの両面をもつ農業を丸ごと理解する機会づくりが重要であると考える[7]。

また、農家との提携活動や農作業体験、援農に積極的に参加する消費者は、①新鮮で安全な食を求めるグループと、②地域の環境を守ることに意識の高いグループと、③農家を経済的に支えていこうというグループの３つに分けた場合、①新鮮で安全な食を手に入れるために参加するという理由が圧倒的に多いという[8]。同様に、有機農産物を農家と提携して購入する消費者を「食の安全派」と「地域環境派」に類型した金（2007）は、有機生産される安全な食べ物には興味があるが、有機農業のめざすものを十分に理解できていない「食の安全派」が一定割合存在することを指摘し、農業・食料をテーマとした社会活動にも興味を持つ「地域環境派」を増やすことが大切であり、そのためには通信などのコミュニケーションを積極的にとるようにする必要があることを提案している[9]。「みのりの小道」でも通信の意義は大きいと認識しているが、先述したように通信を介して、「みのりの小道」に参加し、その中で農業について学び、そして生産者と直接結びつく援農等に進展していく流れを確かなものにしていきたい。

### ３．参加者の顔ぶれを多様にする

援農を充実・継続させていくためには、そのグループのメンバーは世代や職業や性別が一定であるよりも、バラエティに富んで、多様であることが望まれる。都市住民も農・山・漁村の住民も、また子どもからお年寄りに至るさまざまな世代の人々が自主的に楽しみながら学び合うことで、子どもは子どもなりの鋭敏な感性によって、若者や中年世代は未来を担う立場から、そして高齢者は長年の経験にもとづく豊かな知性を発揮して、世代を超えてお互いに切磋琢磨し合うことが予想される[10]。

このように援農参加者の顔ぶれを多様にするためには、皆が集う援農の場を多様にすることが一つの方法として考えられる。福間農園では合鴨水田の周囲の農地に、ブルーベリーなどの小果樹類を中心に植栽を開始している。今後、合鴨の持つ多様な魅力（嘴や羽、足による雑草防除・害虫防除・中耕、散糞による養分供給など）に加え、永年性作物である果樹を利用した立体農法の展開や[11]、さらには、水田や果樹園、およびその周囲において子ども達の冒険遊び場[12]の創設なども考えられる。この援農活動が、単なる農作業体験、生産者と消費者の狭義の連携活動としてだけではなく、生物多様性を実感する場として、地域の子ども達をはじめとする多様な参加者の健やかな成長を育む場として機能する機会づくりになる可能性を模索したい。

## ４．消費者側がコーディネート役となる

先述したように、福間農園の援農における参加者のスケジュール調整や連絡といったコーディネートは、消費者（参加者）側が実施している。このスケジュールの調整や連絡を継続的に行うことは非常に大変であり、この役割を引き受け側の農家が担当することは負担が大きい。

福間農園の援農のコーディネート役は、最近の援農日誌の中で、「雨を気にしているせいか、朝方の雨の音で目が覚めた」と記していた。とくに天候不順が続く冬場では、予定した作業内容が、計画通りできるどうか、毎週心配している様子が見て取れる。このように援農コーディネート役を担うことで、さらに深く農と向き合った暮らし方に近づく機会が与えられたと捉えることもできる。

そこで、このような農作業体験や援農のコーディネート役を一般消費者からどのように発掘・育成すべきかという問題がある。以下、二つの事例を紹介することで検討していきたい。

まず一つ目は、コーディネートを専門に行う人・団体の育成である。松江市には「田舎の森の休暇小屋」という任意団体があり、例えば、松江市西長江での「昔ながらの米作り」を地元農家と協力し合って、年に数回の農作業体験イベント（種まき、田植え、草取り、蛍狩り、稲刈り、収穫祭等）を実施している[13)]。地元農家の話をじっくり聞きながら、外から見た、内側からでは気づきにくい魅力・地域資源を伝え、それらをつなげていくお手伝い役を担っている。

二つ目は、いくつかの自治体で行われている「農業講座」の開講である。例えば、札幌市の市民農業講座「さっぽろ農学校」は、市民を対象に農業に関する知識や栽培技術の習得を通じて新たな農業応援団の育成を目的に、札幌市が2001年度から行っている農業講座（入門コースと専門コース、それぞれ１年間）である。講座修了生は、実際に就農したり、農家への援農作業や農業体験・学校農園活動等における農業ボランティアとして活動したりしている[14)]。同様に、横浜市では1993年度から「市民農業技術講座」を開始し、農家で手伝いができる人材を育てる二年制の実践講座を開催している。講座修了生の有志が援農支援組織をつくり、農家からの求人情報を調整しながら援農を実施している[15)]。

このようなコーディネートの専門家や援農者の育成を目的に、実際に農作業体験イベントや援農を行う中で、その参加者の中からコーディネート役を見いだし、育てていくという流れもあるだろう。島根県は、2007年度から、有機農業推進計画を策定し、技術支援や農業者の取り組み支援、県認証制度の運用などを行っている。その中にはさらに、生産者と消費者の連携活動として、「環境を守る農業宣言」がある[16)]。これは、生産者及び消費者、流通業者、小売店などの県民がそれぞれの立場で、自らが行うことができる環境を守る農業への貢献を宣言する取り組みで、2011年10月末現在で3331件の宣言がなされている。今後、その宣言者間で情報を共有しながら、環境に配慮した生産活動を行う生産者と、環境に配慮した安全な生産物を欲する消費者とを結びつける取り組みを開始していく予定である。この「環境を守る農業宣言」を核として、今後、福間農園での援農のような仕組みづくりを県内で少しずつ構築していくことを願うところである。

注・引用文献

１）山岸主門・巣山弘介・小林伸雄・持田正悦・武田久男・土倉まゆみ・寺田和雄・矢田敬二「ミニ学術植物園『みのりの小道』を活用した『学生とともに育つ大学』と『地域とともに歩む大学』づくり」島根大学生物資源科学部研究報告，第13号，2008年，pp.66-69.

２）内閣府「生涯学習に関する調査」世論調査報告書，平成20年５月調査，2008年，p.26.

３）福間忠士「有機農業は人をつなぐ」日本農業教育学会誌，第42巻別号，2011年，pp.1-4.

４）このコーディネータ役が援農についての思い・感想を島根県農林水産部農畜産振興課作成の島根の環境農業情報誌きらり（第10号，2010年，p.3）に「援農の楽しみ－生産者の方と共有する農業の喜び」と題して記しているので、その一部を以下に引用する。

『私たちが行くことで、かえって邪魔になるのではないかと不安な時期もありましたが、素人の私たちでも必要としてもらっていると気がつき始めたとき、逆にそれが喜びに変わり、今では元気の素となっています。

援農に通っていると、鴨が野生動物に何十羽も殺されたり、この間まで元気だった野菜が、病気になったり虫に食い荒らされたりという残酷なことをたびたび目にします。今まで買うだけではわからなかった農業の大変さを感じる一方で、蒔いた種が芽を出し成長し、収穫という大きな喜びを生産者の方と共有できるのはこの上もなく幸せを感じる瞬間です。援農の時間はわずかですが、無農薬野菜を提供される福間さんのお手伝いをすることで、それを消費する人の健康を後押ししているようでうれしく感じ、生き甲斐にもなっています』

5）熊谷愼之輔「大学開放をめぐる大学教員のタイプ別分析－島根大学の大学開放に関する調査をもとに」島根大学生涯学習教育研究センター研究紀要，第１号，2002年，pp.99-111.
6）山本伸司「有機農業を消費者の立場でバックアップするパルシステム」技術と普及，第45号，2008年，pp.64-66.
7）東正則『滞在型市民農園をゆく－都市農村交流の私的検証』農林統計出版，2009年，pp.203-221.
8）奥村直己「米国におけるCSA運動の多様化－生産者と消費者会員の関係性の変化」有機農業研究年報，第４巻，2004年，pp.207-219.
9）金氣興「有機農業の産消提携における消費者類型―地域環境派と食の安全派」有機農業研究年報，第７巻，2007年，pp.185-197.
10）小貫雅男・伊藤恵子『菜園家族21－分かちあいの世界へ』コモンズ，2008年，pp.197-222.
11）賀川豊彦・藤崎盛一『立体農業の理論と実際』日本評論社，1935年，pp.1-174.
12）羽根木プレーパークの会『冒険遊び場がやってきた！』晶文社，1987年，pp.13-16.
13）森則子「自然と人と、人と人がつながる場所」日本農業教育学会誌，第42巻別号，2011年，pp.5-8.
14）中田ヒロヤス「農作業ボランティアや農業と市民をつなぐパイプ役『農作業体験スタッフ等』を育てる」自然と人間を結ぶ，第41号，2008年，pp.68-75.
15）大江正章『地域の力』岩波書店，2008年，pp.174-196.
16）栗原一郎・安達康弘・月森弘・加納正浩・竹山孝治「島根県における有機農業推進施策の状況と有機農業技術開発」有機農業研究，第３巻第１号，2011年，pp.61-66.